國學院大學學術情報リポジトリ

万葉集、八代集における歌枕「須磨」の発展と変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬, 嵐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001580

万葉集、八代集における歌枕「須磨」の発展と変化

The Development of Utamakura “Suma” from *Manyōshū* to *Hachidaishū*

馬 嵐

キーワード：須磨 歌枕 形成原因 万葉集 八代集

关键词：須磨、歌枕、形成原因、万叶集、八代集

要旨

「須磨」という歌枕は重要な歌枕の一つである。万葉集時代、須磨はもともと海人が塩を焼く漁村としてのイメージを持って、和歌の中に登場した。しかし、そのときのイメージはまだ統一していないため、歌枕としてはまだ定着していなかった。古今集時代になると、万葉集時代のイメージを継承しつつ、新たな発想も現れた。また、定着したイメージを持ち、一つの歌枕として使い始めた。古今集から新古今集時代まで、表現手法が多くなるとともに、比喩に使われ、「なみ」と併用したり、「須磨の関」「須磨の関守」というイメージで「千鳥」「月」などと併用したりして、多様な芸術表現力を表した。

摘要

“須磨”这一歌枕是重要歌枕之一。在万叶集时代，须磨是作为渔女烘烤海水制盐的渔村形象出现在和歌中的。但由于当时须磨的各种意象未曾统一，所以并没有成为固定的歌枕。古今集时代，须磨不仅继承了万叶集时代的意象，还发展出很多新的用法。在古今集时代须磨终于固定下来，成为了一个歌枕。从古今集时代到新古今集时代，随着表现手法的增多，须磨或与“波浪”并用，或以“须磨关”“须磨守关人”的意象出现，与“千鸟”“月”等词语并用，展现了丰富多样的艺术表现力。

歌枕とは、和歌に詠まれて有名になった各地の名所・旧跡である。歌人は最初にあるところの景色を使って、心境を表す。後、その景色が歌人の間に、一定の共通イメージをもち、歌言葉として定着し、歌枕となった。

須磨は地理上、現在の神戸市須磨区に当たる。西隣の明石は播磨国に属し、この須磨は摂津国の西端、畿内の外れにあたる。古代の須磨は海人の塩焼く煙が絶えない漁村であった。

まずは万葉集の中、「須磨」のイメージについて分析してみたい。

資料一 万葉集⁽¹⁾の中の「須磨」

- 0413 須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着馴れず
0947 須磨の海人の塩焼き衣のなれなばか一日も君を忘れて思はむ
3932 須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛さ恋をも我れはするかも

資料一から見えるように、万葉集の中、「須磨」という歌枕を含む歌は合計三首である。それらの歌は巻三の413番、巻六の947番と巻十七の3932番である。いずれも単純に景観を表す歌ではなく、序詞あるいは比喩に用いられ、感情を表す歌である。三首の中、413番と947番の「須磨」は「塩焼き衣」と併用している。また、3932番の「須磨」は「焼く塩の辛さ」と併用している。

413番は須磨の海人の塩焼き衣のごまごわした感じを素直に描写したものである。この歌は大網公人主が宴会で詠んだ和歌で、単純に塩焼き衣が体に合わないを描写しているわけではない。新編日本古典文学全集の注によると、「『間遠に』は通い始めて日が浅く、互いになじまないことの比喩」であり、新潮日本古典集成は「新妻を『藤衣』に譬え、しげしげと逢えないと言いながら、実は新婚の気分を逆説的に歌ったのろけ歌か」と注釈した。こうすると、この歌は宴の場で、酔った勢いで飛び出す恋歌と理解してもいいだろう。

947番は946番の反歌である。946番は世間の評判を考えて、妻に会いたいと思っても、間使を送ることができない苦しい気持ちを表す。その反歌としての947番は素直に自分の愛情を表している。海人が塩焼き衣を着慣れたように、旅する歌人も一日も妻を忘れることができないと詠んだ。この歌も、海人と塩焼き衣という比喩を使って、自分と妻の関係を表している。

3932番は前の二首と違って、独特な感覚を持っている。同じ製塩事業の描写

(1) 本論による万葉集、古今集、新古今集の和歌は小学館の日本古典文学全集から引用している。後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集の和歌は岩波書店の新日本古典文学大系から引用している。続古今集の和歌は大学堂書店の『続古今和歌集全注釈』(1994)から引用している。玉葉集の和歌は明治書院の和歌文学大系『玉葉和歌集』(2016)から引用している。

を通して、感情を描くものだが、「須磨人の 海辺常去らず 焼く塩の 辛さ恋をも 我れはするかも」という歌の中、塩焼き衣のごわごわ感ではなく、塩のしょっぱさを通して、恋の辛さを描いている。

まとめてみると、「海人」「塩焼き衣」「焼く塩」など、万葉時代の須磨は製塩事業を行う漁村というイメージで捉えられている。この時代、歌人たちは須磨の自然景色ではなく、労働の風景を使って歌を詠んだ。以上の三首の歌はいずれも塩焼くという実景と深く関わっている。また、須磨は都から離れた、自然的に独立な空間となっている。そのため、須磨にはもともと、幻想的、大胆的な要素がそなえている。須磨には須磨ならではの風景がある。透き通った塩焼く衣を着ている海人、周りが全部海、独立としている空間の中で、何を詠んでも自然が許してくれるというような雰囲気がある。荒涼な環境の中、海人（その多くは女性である）が透き通った塩焼く衣を着ている姿を見ると、自然に情欲が沸いて、妻の事を思い出す。最初に須磨が恋歌と深く結んでいるのは、おそらくこの原因にあるだろう。こういう意味で、須磨という歌枕はほかの都に近い自然風景を表す歌枕より、生き生きとした生命力を持っている。万葉時代、「須磨」という歌枕はある程度歌枕化されていた。しかし、具体的な、統一的なイメージはまだ形成されていない。

資料二 古今集の中の「須磨」

708 題知らず 詠み人知らず

須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思わぬ方にたなびきにけり

758 詠み人知らず

須磨の海人の塩焼衣箆をあらみ間遠にあれや君が来まさぬ

962 田むらの御時に事にあたりてつにくにのすまといふ所にこもり侍りける

に、宮のうちに侍りける人につかはしける 在原行平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ

資料二から見えるように、古今集の時代になると、「須磨」という歌枕を使った和歌は708、758、962の三首である。製塩事業と関わっているが、塩焼き衣以外に、「塩焼く煙」と「塩垂れ」の二つのイメージが現れた。資料二にも示

したとおり、708番の歌は、万葉集の1246番「志賀の海人の 塩やく煙 風をいたみ 立ちのはほらで 山にたなびく」と明かに関係を持っている。万葉集の1246番歌は単に自然風貌を描く歌だが、古今集の中では、巧みな比喩の歌になっており、恋歌として作り直されている。また、万葉集の0413番と古今集の758番とを比較すると、その発想の継承関係もはっきりと見える。しかし、表現の面では、万葉集よりさらに深い面に触れた。0413番は客観的に塩焼き衣のまばらな繊維を描いているが、758番はまばらな繊維から双方の関係の遠さという連想ができた。つまり、現実には留まらず、須磨の環境や風景のイメージに留まらず、想像を混ざった須磨のイメージが生じ始めた。

962番は須磨を詠む歌の中でも、特別な歌である。この歌は在原行平がある事件にかかわって摂津国の須磨に引きこもっているうちに作った歌であることが詞書に記されている。この歌の中、始めて「須磨の浦に藻塩たれつつ」というような表現を使った。つまり藻塩草から潮水が垂れる様子を使って涙を形容した。彼は実際に須磨に住んでいたため、真実味を持つ比喩を使うことができた。

以上の三首の歌を見ると、次のような傾向が見える。①歌枕の面から見れば、万葉集の発想をそのまま継承したものもあるが、新たな発想もある。新たに併用した言葉は具体的な製塩工程まで触れた。しかも、いずれも「塩焼き」をめぐる言葉である。②同じ恋心を表現しても、素直に心境を語る歌が減り、恋心の表し方が婉曲的になった。③万葉集の時代のバラバラなイメージと違って、「須磨」にはすでに定着したイメージをもち、荒涼な景色を背景に、辛い心情を表す歌枕として使われている。

資料三 須磨の「波」を含む和歌

後撰

800 あだに見え侍りけるをとこに よみ人しらず
こりずまの浦の白浪立ちいでてよるほどもなくかへるばかりか

拾遺集

477 題知らず ひとまる
白浪はたてど衣にかさならずあかしもすまもおのがうらうら

後拾遺

520 つくしへくだりけるに、みちにてすまのうらにてよみ侍ける 大中臣能宣朝臣

須磨の浦をけふすぐゆくと来し方へ返る波にやことをつてまし

千載

536 百首歌よみ侍りける時、旅のうたとてよめる 藤原家隆

たびねするすまのうらちのさよ千どりこゑこそ袖の浪はかけけれ

1047 権中納言実宗

はりまがたすまのはれまにみわたせば浪は雲あのものにぞありける

新古今

1041 道信朝臣

すまのあまのなみかけ衣よそにのみきくはわが身になりけるかな

1434 題しらず 藤原惟成

しら波はたちさわぐともこりずまのうらのみるめはからむとぞおもふ

「須磨」が正式に歌枕として定着したのが古今集の時であった。後撰集に、初めて塩焼きと関係のない、「白浪」というイメージと「須磨」の組み合わせが現れた。資料三に見えるように、八代集の中、「白浪」あるいは「波」というイメージを使った和歌が全部で7首ある。「白浪」は後撰集の段階から、比喩として使われている。拾遺集では、さらに言語遊戯的な用法として認識されている。ここで「衣を裁つ」と「波が裁つ」が言語遊戯となって、「布は裁って縫えば、表と裏があるが、白波が立ったとしても、私の衣に重なることはない」という遊びをしている。後撰集では波が帰ってくるという特質を使って歌を作った。しかし、その時、「浪」は比喩に使われたにも関わらず、特定なイメージを持ってはいない。千載和歌集の536番から、「須磨」の歌枕は、袖にかける波、あるいは衣にかける波というイメージで使われ始めた。このような用法は、古今集の962番の藻塩垂れの発想と同じく、袖にかける波が実際の波ではなく、涙のことを指す。この場合、波はすでに実景ではなく、特定の比喩的な意味を持って使われている。新古今和歌集になると、実在の白浪として使われる歌は一首である。袖にかける波、袖を濡れる藻塩の水を涙に比喩した歌が多い。そ

の時点で、実景より、想像的な要素をもつイメージが主要な歌われ方となった。また、和歌集を調べても、「波かけ衣」という歌語がよく「須磨」と併用されている。須磨の風景や風物を隠喩として使用する時点で、浦に寄せる波という須磨の風景が徐々に真実味を失いつつある。

資料四 「須磨の関」「須磨の関守」に関する和歌

続古今

868 津の国の須磨と言ふ所に侍りける時、詠み侍りける。 中納言行平
旅人は 袂涼しく なりにけり 関吹き越ゆる 須磨の浦風

玉葉

1222 題知らず 中納言行平
幾たびか 同じ寝覚めに 馴れぬらん 苦屋にかかる 須磨の浦波

金葉

270 関路千鳥といへることをよめる 源兼昌
あはぢしまかよふ千鳥のなくこ糸にいくよねざめぬすまのせきもり

千載

425 千鳥をよめる 皇太后宮大夫俊成
すまのせき有明のそらになく千鳥かたぶく月はなれもかなしき

499 法性寺入道前太政大臣、内大臣に侍りける時、関路月といへるころを
よみ侍りける 中納言師俊

はりまちやすまのせきやのいたびさし月もれとてやまばらなるらん

501 堀河院御時、百首歌たてまつりける時、旅のうたとてよみ侍りける 中
納言国信

浪のうへにあり明の月をみましやはすまのせきやにとまらざりせば

535 関路暁月といへるころをよめる 法眼兼覚

いつもかく有あけの月のあけがたは物やかなしきすまの関守

新古今

1599 天曆御時屏風歌 壬生忠見

秋風の関吹きこゆる度ごとにこゑうちそふる須磨の浦なみ

1600 五十首歌よみてたてまつりしに 前大僧正慈円

すまの関ゆめをとほさぬ波の音をおもひもよらで宿をかりけり

「須磨」に関して、もう一つ注目すべきイメージは「須磨の関」あるいは「須磨の関守」である。資料四に見えるように、「須磨の関」というイメージが最初に在原行平の和歌に現れた。彼が京から離れ、須磨にいた頃、「旅人は たもとすずしく なりにけり 関吹く越ゆる 須磨の浦風」（続古今868）という歌を詠んだ。羈旅歌として、旅人の気持ちを描いた。また、玉葉集の中にも、彼の羈旅歌も収録されている。「いくたびか 同じ寝覚めに なれぬらむ とまやにかかる 須磨の浦波」という歌は、慣れない異境の地で眠ることができない旅人のイメージを描いた。「風」「浪」「眠れない夜」のコラボレーションが、源氏物語の「須磨巻」のモチーフとなったことが知られている。源氏物語「須磨巻」の始まりには、「須磨には、いとど心尽くしの秋風に、行平中納言の「関吹き越ゆる」といいけむ。浦波、夜夜はげにいと近く聞こえて、またなくあわれなるものは、かかる所の秋なりけり」と書かれている。ここで、「須磨」「風」「波」「夜」などの要素が全部揃った。

歌集の中に「須磨の関守」というイメージが最初に金葉集の270番に出てきた。270番は荒涼とした背景の中、千鳥の寂しい声を聞いて眠れない関守のイメージを描いた。源兼昌が実際に須磨に行ったのではなく、歌合せの「関路の千鳥」という題からこの歌を創作した。しかし、なぜ千鳥を選んだのだろうか。源氏物語に「友千鳥 もろ声に鳴く あかつきは ひとり寝覚の ともたのもし」という歌がある。そのため、兼昌の歌は源氏物語の須磨巻を意識して、作られた歌と指摘された。また、そこから、「千鳥」も「須磨の関」の組み合わせがよく詠まれるようになった。千載和歌集になると、「須磨」と「関守」の関係がさらに緊密になった。また、新たなイメージも加わった。千載集の9首の中、5首の「須磨」が「関守」と併用していて、さらに「千鳥」以外に、「月」という要素を加えられた。組み合わせとして、425番の「千鳥」と「月」、499番の「とまや」と「月」、501番の「浪」「月」と「関屋」、535番の「月」と「寝れない」、536番の「旅寝」「千鳥」と「袖にかける波」などの組み合わせが見える。

資料五 新古今集の中の「須磨」

- 1041 道信朝臣
すまのあまのなみかけ衣よそにのみきくはわが身になりけるかな
- 1065 人につかはしける 藤原清正
すまのうらにあまのこりつむもしほ木のからくもしたにもえわたるかな
- 1083 百首歌たてまつりし時、恋歌 摂政太政大臣
恋をのみすまのうらびともしほたれほしあへぬ袖のはてをしらばや
- 1117 海辺恋といふことをよめる 定家朝臣
すまの海士の袖にふきこすしほかぜのなるとはすれどてにもたまらず
- 1210 天曆御時、まどほにあれやと侍りければ 女御徽子女王
なれゆくはうき世なればやすまのあまのしほやき衣まどほなるらん
- 1434 題しらず 藤原惟成
しら波はたちさわぐともこりずまのうらのみるめはからむとぞおもふ
- 1557 定家朝臣
もしほくむ袖の月かげおのづからよそにあかさぬすまのうら人
- 1598 春 すまのかたにまかりてよめる 藤原孝善
須磨の浦のなぎたるあさはめもはるに霞にまがふあまのつり舟
- 1599 天曆御時屏風歌 壬生忠見
秋風の関吹きこゆる度ごとにこゑうちそふる須磨の浦なみ
- 1600 五十首歌よみてたてまつりしに 前大僧正慈円
すまの関ゆめをとほさぬ波の音をおもひもよらで宿をかりけり

最後は資料五に見えるように、新古今集の中、「須磨」という歌枕を使った和歌は10首である。その中、恋歌が六首で、半分以上占めている。これらの恋歌の中では、万葉集や古今集時代の「塩焼き衣」を使ったものが一首で、波や塩垂れで涙を比喻するものが三首である。また、白浪を使ったものも一首存在している。新古今集以前の「須磨」のイメージを継承しつつ、技巧的な暗示、比喻などを含む歌に偏っている。雑歌の中、単純な叙景歌が一首存在していて、「須磨の関」を詠むものが2首である。その2首の中、1599番の本歌が行平の「旅人は たもとすずしく なりにけり 関吹く越ゆる 須磨の浦風」である。も

う一首の1600番にも、「波」「宿」などの要素が揃っている。

これらの和歌の特徴をまとめると、以下のような傾向が見られる。①「須磨」を使った歌は古今集時代になると、恋歌に限られない点である。万葉時代、「須磨」は恋歌のみに使われた。古今集時代になると、恋の辛さだけではなく、景色に似合う荒涼な寂しさを表す和歌が出現した。その傾向が新古今時代に至り、さらに発展した。恋歌だけではなく、羈旅歌、屏風歌などにも取り入れられた。②「須磨」は新古今集時代、歌枕として成熟した点である。最初の描写は塩焼くという製塩事業にとどまった。しかし、八代集の時代から、描写がだんだん実景から離れ、幻想的な要素にさらに実景を重ね、実景がまたイメージ化し、「須磨」から想起されたイメージが次々と定着した。③表現手法が多くなった点である。暗示、象徴的な表現を使って、荒涼とした光景だけではなく、哀愁的、妖艶な魅力を見せた。④「須磨」は総括的に切ないという感情を基本とするが、感情が古今集よりさらに細分化され、美しさに溢れる淡い哀愁、繊細で趣の深い感情が描写された。また、美意識に対する把握がさらに繊細になった。

歌枕の変化は決して突発的なものではなく、歌枕としての継承と変化の筋道がある。今回は万葉集、八代集における「須磨」について考察し、その発展と変化の筋を整理した。この過程を考察することで、以下のような結論に至った。①歌枕は、最初の段階では実景に基づいて創作されたものであったが、時代の変化に従って、歌人個人の経験が歌人全員に共有化され、元の実景が幻想化される。また新たな実景の要素が加わり、歌枕のイメージが徐々に豊かになる。歌枕は実景から離れるのが宿命だが、実景を離れて、単独で発展することができない。②「須磨」という歌枕が万葉集のとき、もっとも基礎的、原始的なイメージは塩焼く漁村であった。歌枕として、定着したのは古今集時代である。人麻呂によって、「白浪」という自然景色が「須磨」と併用されたが、主流にはならず、須磨は漁村であるイメージが強かったのである。千載集の時代に入って、やはり塩焼く漁村が現実生活から離れすぎると、「須磨の関」あるいは「須磨の関守」というイメージが代わりに主流になった。しかし、万葉集の歌で描かれた「塩焼く漁村」のイメージは、八代集の時代となっても依然として継承されたのである。新古今集になると、技巧的な用法に偏り、歌枕「須磨」はそれ以前のイメージを継承しつつ、新たな歌の世界が開かれた。「須磨」は荒涼

な漁村でも、うら寂しい関でもある。感情の基調を残しつつ、感情の深みが増え、感情の内包も増えたといえる。

参考文献

1. 竹尾利夫 (1991) 「万葉集の地名表現 - 歌枕化への諸相 -」 『名古屋女子大学紀要 人文・社会編37』 P322-313
2. 吉原栄徳 (1986) 「古今集の歌枕 (その2) 万葉歌枕からの伝承と展開」 『園田国文7』 P1-19
3. 吉原栄徳 (1986) 「古今集の歌枕 (その3) 八代集における展開」 『園田語文創刊号』 P15-32
4. 片桐洋一 (1970) 「歌枕の成立—古今集表現研究の一部として—」 『国語と国文学』 第47巻4号
5. 佐々木忠慧 (1970) 「歌枕の成立過程」 『文芸研究』 (66) P12-21
6. 小町谷照彦 (1966) 「古今集の歌枕：和歌表現論序説」 『日本文学』 15 (8) P550-558